

飯島賢二の

やさしく解決！ 難問道場

第42回



株式会社 飯島 綜研 代表取締役 飯島 賢二

Q コンプライアンスを逸脱した行為が目立つ昨今、経営者としての指針について教えてください。

A

「能を舞う演者である自分は、目前や左右までは見ることができる。それは自分の目で見ているにすぎず『我見』（がけん）である。しかし『我見』では、自分の後ろ姿まで見ることはできない。つまり、『我見』では自分の姿を見ることはできない。舞っている自分の姿を見ることができるのは、舞台を客席から見ている『お客様の目』である。それを『離見』（りけん）という。『離見の見』（りけんのけん）にて見れば、『見所同心の見』といって全体を捉えることができる。特に後ろ姿は『離見の見』、つまり、あらゆる観客の目の位置に自らの心の目を置いて、自分の完璧な舞姿を見届けなければならない」。これは世阿弥が書いた『花鏡』（かきょう）の秘伝で、晩年の世阿弥の達した境地です。「能」に限らず、現代の経営者や講演家にとっても、極めて重要な概念だと思っています。

この言葉には二つの教えがあると思います。

一つは経営の基本、経営者のあり方です。「離見の見」では、自分はいくまで当事者でありながら、一方では観客の視点から自分の行動を見て、冷静に必要な修正を行うことができます。ただ、評論家的に分析するのではなく、当事者として実際に結果

に違いをつくることに主眼があるのだという教えです。お客様から見える自分を意識する、お客様が何を求め、何に満足を感じ、何に感動するのか、これはマーケティングの重要性と必然性の原点に違いありません。古くは「消費者志向」、最近では「顧客満足度」など良く目にする言葉であり、コンサルタントの先生からも、耳にタコができるほど聞かされてきました。

二つめは、舞の流動に身をまかせている演者が陥りやすい陶醉に、鋭く釘をさす演劇的身体の二元論です。俳優は、演じている自分とそれを客観的に認識している自分を常に合わせ持たなければなりません。演技や役に没入する自分と、それを醒めた目で見つめる自分との二重性を生きることが、すぐれた役者の要件だと言うのです。経営者も全く同じだと思っています。自分に陶醉するにつれ、周りが見えず、声も聞こえなくなってくる。その結果が傲慢、横暴、独裁となり、消費者はもちろん、従業員や取引業者からも見放され、経営が悪化していくことは自明の理でしょう。

現代の経営者に最も欠けている一つである「経営人としての真理」、世阿弥という人は、今から約600年以上前の室町時代に、「離見の見」という言い方で説いているのです。

「これからも、ずっと中小企業の強い味方であり続けたい…」

日本経済を支えている中小企業をあらゆる面からサポートし、ご満足いただく。ここに、当社の存在価値があります。

IKG 株式会社 飯島 綜研

代表取締役会長 飯島 賢二
税理士・中小企業診断士

〒360-0024 埼玉県熊谷市問屋町2-4-18 ソシオ熊谷情報センター2F TEL 048-528-2191 FAX 048-528-2197
IKGホームページ <http://www.ik-g.jp>